

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 袴田 渉

本論文は、五世紀末から六世紀初頭に著されたと想定される一群の著作、いわゆる『ディオニュシオス文書』(以下『文書』)において、人間の「神化」、すなわち人間としての究極的完成態がどのように説かれているのか、その内実に迫ろうとしたものである。そのための方法論的態度として、「序論」では、『文書』がディオニュシオス・アレオパギテースを著者に擬して作成されたという歴史的状況に配慮すること、そして、先行する教父たちや新プラトン主義の文献とは異なる『文書』特有の語彙や語法に着目すること、の二点が強調される。それによって、『文書』がキリスト教史上に新たな思想表現を生み出していることを示そうとする。

三つの章からなる第一部「越境」では、主に新プラトン主義との相違が主題となる。人間「神化」の前提となる神の子の「受肉」を言う語としての“ousioō”、「神化」自体を言う語“ektheōsis”、また神化の内実である神との「類似」を意味する“aphomoiōsis”といった鍵語の、先行諸文献および『文書』における用方や意味内容が精査され、『文書』においては、神の受肉がこの世界を超えた超越的原理の一方的下降ではなく人間の側の働きを伴うなんらか協働的なものとされていること、地上の教会秩序(ヒエラルキア)内で実現する神との「類似」化は救済の業を行うキリストの業の「再現」であること、等が指摘される。これを受けて、四章からなる第二部「死」と神化」では、『文書』の「神化」思想をめぐっていくつかの観点から接近が試みられる。神の「実体」と「力」を区別することで、『文書』の一つ『神名論』におけるさまざまな神の名づけが多神教になることなく可能になっていること(第四章)、同じく『教会位階論』に語られた「死者のための儀礼」論では人間が身体をもってこの世に生きる本質的に「心身的」存在と捉えられていること(第五章)、アガペーと対比的に解されることの多いエロースを神名として再導入するべく、天地創造の意志に先立つ神の根源的情動としてエロースが再定義されていること(第六章)、そして『文書』の頂点をなす『神秘神学』では、人が最後に「這入って(eisdunō)」いく神の暗黒が、認識不可能でありつつ人がそこに究極的に「帰属する場所」として、なんらか空間的・場所的に捉えられていること(第七章)、等が論じられていく。

それぞれの論点の説得性については、教父や新プラトン主義文献の正確な理解に基づいたより精緻な議論が求められるところも残るが、これまでほとんど研究されてこなかった『教会位階論』を含め、袴田氏が『文書』の全体に精通し、その匿名の著者の思考の特質を鋭い着眼によって浮き彫りにし、多くの魅力的な読解をなしえていることはたしかである。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位授与に値するものと判断する。